

〈はじめに〉

海外の国と日本の文化との違い、について気になっていた私にとってこの国際高校での1番の刺激的な学びは、English for Academic Purposes (学術分野のための英語 以下EAP)の授業内で見たアメリカの学習スタイルである。自分の好きな授業を柔軟に決めることができる。わからないことがあればすぐに先生に聞く。テストの点数以外での評価が成績を決める。全てが日本と全く違うと思った。日本人はシャイであり人前で発言しないとよく言われる。しかしなぜ、そのようなイメージが全世界の人たちに広まっているのだろうか。人が育つには、教育のプロセスが重要になってくる。そこで、幼少期や青年期を過ごし、その人格を形成する役割を果たす教育の場、つまり学校がこの状況を作り出しているのではないかというように考え出した。

〈序論〉

そもそもグローバル化が進む社会において、求められる人材とはどのようなものか。「コミュニケーション能力のある人」「自分の意見をしっかりとと言える人」「さまざまな分野において知識がある人」、これら全てはグローバル人材としてこれからの社会に必要なのではないだろうか。そしてそのような人材のイメージとしてよく上がるのはアメリカやヨーロッパのリーダーたちだ。国連事務局長が選び、国連の活動に世界の関心を集めるための国連ピース・メッセンジャーという広報活動には日本からの協力者は今まで選ばれていない。極端な例ではあるが、他国から見たときに日本にはグローバルに活躍できる人が少なく、目立たないということの現れというようにも捉えることができる。しかし、教育スタイルの全く違うアメリカではそのような人が多いように思える。日本人がコミュニケーション能力を発揮し、自らの考えを声に出して言える、という状況を妨げているのは他でもない日本の教育制度にあると考えた。これからの日本の担い手として高校で実際に教育を受けている私にとって、小学校からの義務教育も含め授業内からグローバルに活躍できる、というようなスキルを得たとは感じていない。それよりもEAPの授業内で見たアメリカの学校の学習スタイルの方が幾分かグローバル人材育成という面において力を発揮できていると感じた。

実際に海外で働く国民の割合として、2016年のデータでは日本では海外在留の割合は約1%であるのに対し、約37%のアメリカ人が国外で暮らしていることがわかっている。(資料1) 国は違うといえども、海外に進出して生活をするという行動に対しての能力差や意識の差があることは明確だ。この約36%の差の中には、先ほど挙げたような教育制度の違いが大きく関わっていると考える。日本のベーシックな授業スタイルである受動的な教育環境というものの自体が、自らコミュニケーションを取らなくてもいい環境を作り出し、私たちの積極的な発言力や、自分の考えを声にあげるといった行為を減少させ、グローバル人材としての成長を妨げているきっかけとして捉えた。

グローバルに活躍のできる人材として日本の教育がこれからどのように変わるべきなのか、それに対して私たちはどのようなアプローチができるのかを調べるために、「グローバルと私たち」というテーマで探究活動を始めた。

〈本論〉

まず私たちが行った活動として、世間一般的に社会で求められているグローバル人材とはどのようなものなのかを調べた。教育を司る文部科学省では「相手の立場に立って互いを理解し、さらにはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材」(途中抜粋)というような定義づけがされていた。また経済

産業省では、「語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーなどを有する人材」と言ったように、政府ではそれほどまでに大した差はなく定義づけられていることがわかる。では実際に企業が掲げている、求める人物像とはどのようなものなのか。「他者のために力を発揮して信頼を得ると同時に、常に謙虚な姿勢で、失敗も学びに変える人間力。そして周りの人たちと手を取り合い、挑み、実現する情熱」という定義は、全世界のグローバル企業ランキング(資料2)で、日本の企業として初めてランクインしているトヨタ自動車(2022年 資料3)の求める人物像だ。このランキングでのトップは誰もが知るAppleである。Appleは日本よりもグローバル化が進んでいるといわれるアメリカの企業であるが、そこでは明確な人物像は挙げていないものの「社会的責任を担う企業市民を牽引する立場として、世界に変化をもたらせるよう働きかけること」ができる人材を求めると掲げている(2022年 資料4)。日本政府が掲げているグローバル人材の定義と、実際に日本国内海外問わず、企業が求めている人材というのとは一致しているといえる。しかし、その定義は多岐に渡り、どのゴールを目標として自らに掲げるのかを、私たちはつかむことができずに悩み、その結果グローバル人材になって世界を股にかけて活動しようという心意気が湧かないのではないか。そこで、私たちがなりにわかりやすくまとめた定義を考案した。

『変化を受け入れ、課題を設定し、私たちのスキルで解決できる人、  
あるいは様々な変化の中で何か知恵を振り絞って行動を起こせる人』

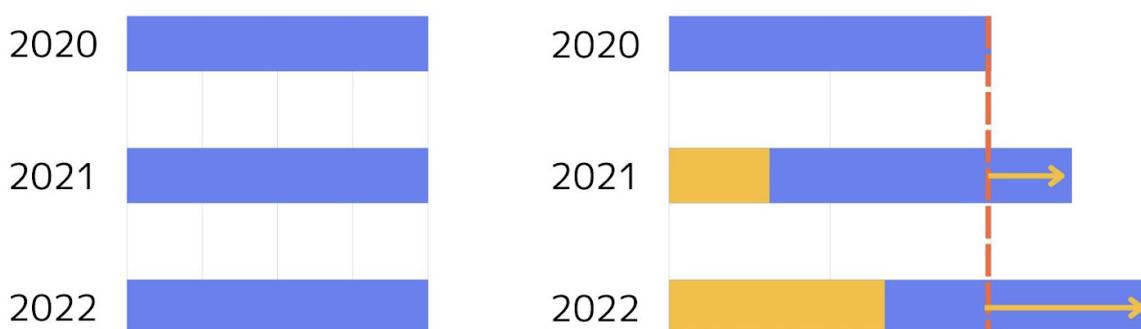
これは自分達が調べたさまざまな定義を、今高校生として生活している私たちの周りにも伝えやすくするために一つにまとめた集大成である。この定義が日本中に広まり、教育システムの根本的改革が一番望ましいことではあるが、あくまでこの定義は私たちが作成しただけのものである。もっと言えば、私たちがこんな人材になりたいと思うと同時に周りにいる人たちもこのような考えを持って日々成長できるような人であればいいと考えた結果、まずはこの国際高校内の生徒にターゲットを絞り活動を始めていった。

その活動の形として一番大きな成果となったのが「つながる一む」の作成、運営である。「つながる一む」というのは、先に挙げた私たちの考えた定義を国際高校の生徒に具現化するために校内に作った教室のことで、よりたくさん生徒の成長につなげる、という目標を叶えるために自由に使用することができる。「成長の方法」というのも一概に1つの方法だけでなく、生徒が「多様なバックグラウンドを得る」ことができ、生徒が「スキルアップができる環境」を目指して、運営している。ここでの「多様なバックグラウンド」とは経歴や経験など、その人自身をつくりあげているものを示す。

初めに、国際高校の生徒が「スキルアップができる環境」という観点について述べていく。私たちの中では、スキルアップという言葉は元々自分のスキルを1として持っているところに他の知識や経験、つまり下記にある「バックグラウンド」を交えてより自分のスキルを上げていくこと、と捉えている。学校という場所で学んでいる私たちにとって、学習を通して知識を、学校生活の中で経験を身につけることは当たり前のことであるだろう。では実際に、どのような学びがスキルアップのために必要なのだろうか。その答えが顕著に表れているのが、TOEFL iBT test and score data summary の2021年のデータだ。(資料5) TOEFLは世界中で行われている英語の4技能テストであるが、その中でSpeakingの観点ではアジア35か国中35位、トータルスコアでも下から3番目という悲惨とも言える結果だった。そもそも、日本人が全体的に英語学習が苦手、と言ってしまえばそこまでであるが、それでも教育環境が整っている今日の日本での結果としては少し疑念を抱かざるを得ない。それこそが日本人の弱く成長が必要な部分、自らの発信力が無いという部分につながると私たちは考える。では、なぜそれほどまでに私たちのスキルが低いとされているのか。それは前出の通り日本の教育スタイルに問題があるとして私たちは探究を進めた。先ほどのTOEFLのデータの中でReadingのスキルにおいては全体で26位と低いものの最下位ではないことがわかった。Benesse(2020年 資料6)の調査によると、80%以上の高校生が、文法の問題を解いたり、英語を日本語に訳すような英語学習を行なっていることがわかる。つま

り、英語を座学で勉強しているのである。その現状を聞くと、先ほどのSpeakingの結果も納得できるように、日本では能動的に自ら動いて考えるという勉強方法ではなく、先生の話聞くだけの受動的な授業が多いことがデータからもわかる。その現状こそが私たちのスキルアップを妨げる一因になっていると思う。ではなぜ、受動的な授業が多いのか。私たちの勉強のゴールとしてあげられるのはテストのため、という回答であるように思える。私たちが自ら考えることが重要なのではなく、テストのために知識を深め暗記をする、というのが日本の教育から今の私たちに求められているのではないだろうか。実際に例を挙げるとすると大学入学共通テスト(以下 共通テスト)が顕著にその状態が表れていると思う。日本の国公立大学の入試に際してはほとんどの場合入学選抜のために使用される共通テストであるが、英語の試験項目にスピーキングを問われる問題は含まれていない。以前行われていた大学入試センター試験と比べると文法問題の撤廃などの変化を見せてはいるものの、依然として暗記をするような問題がメインである。このことからわかるように、テストのためにする学習、という学校の授業を受けてきている。しかし、もっと日本が発展するためにも、そして私たちが一個人として海外で通用するような人材になるためにも今のままではいけないだろう。そこで重要なのが、スキルアップができる環境を用意自ら学ぼうとする姿勢を養うことであると私たちは考えている。受動的にではなく、自身が学びたいと思え、より自分を高めるのに必要な環境である。その部分を補えるのが「つながる一む」である。

もう1つ私たちは「多様なバックグラウンドを得る」という部分に着目をして活動をしている。前に記したように、現在日本社会は世界全体的なグローバル化によって変化を余儀なくされている状況である。その変化に伴って、自らをより高めようとする人材こそが私たちの考える「変化を受け入れる」者に当てはまる。そうは言っても、変化を受け入れるということはすなわちさまざまなことを試して経験してみなければ、自身との違いに気づくことができないため本末転倒である。多様な経験を通し、自己との違いを感じるからこそ、その人にとってのスキル、すなわちバックグラウンドとなる部分を強化し、そこから他のものに対しての変化を受け入れることにつながると私たちは考えている。そのためにも、他者の経験や話の共有を通して、自分の視点とは違ったことを学ぶ必要がある。つながる一むでは、これまで「プレゼンテーション講座」や「デザイン講座」などの普段日常の学校の授業では学ばないような学習の場を提供できるよう運営してきた。この一連の流れを私たちは「多様なバックグラウンドを得る」と認識し、下記のグラフの黄色の部分に当てはまると考えている。



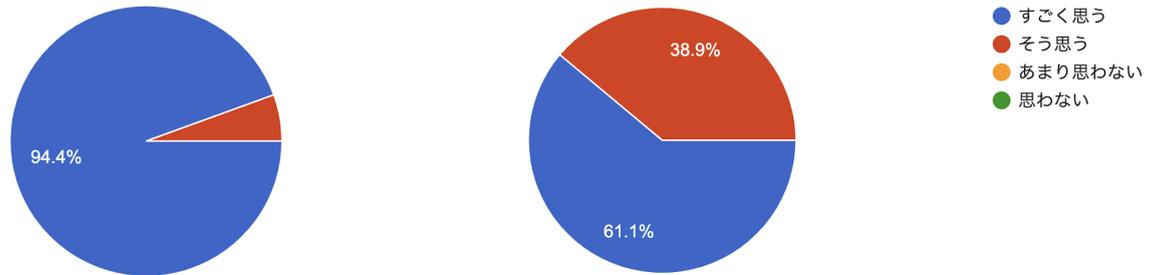
講座を開いたのは私たちファミリーのメンバーであり、時に考えに賛同してくれた他のゼミの仲間も交えて取り組んできた。生徒が生徒に対して教えるというこの状況はまさしく、他人からの学びや経験の共有、というものに当てはまると考える。この伝承こそが次世代のスキルアップに必要な欠かせないものだ。年々、そういった学びを受ける機会が多ければ多いほど次に伝えることが多くなりその学びを得て自分も成長し、次に「つなぐ」ことで後輩たちの成長をサポートすることもできる。この国際高校はまだできて間もないからこそ成長の余地があると考え、このスタイルをこれからも続けていくべきであると思う。「つながる一む」にはそれを可能にする力があると考えている。

## 〈結論〉

以上が私たちの行ってきた活動の概要である。つながる一むを設置・運営しその結果として、行った利用者アンケートの結果を下記にまとめた。

つながる一むの雰囲気はよかったですか？

つながる一むにまた来ようと思いますか？



### ▲つながる一む利用者へ利用直後に行ったアンケートの結果 (2022/4/27～2022/6/18の回答)

アンケート結果からもわかるように、つながる一むは利用してくれた生徒たちに少なからず良い影響を与えたのではないかと私たちは考える。私たちが始めた新たな活動であったため、利用者の反応は気になる部分ではあったが、私たちが行った講座や、空気感がたくさんの国際生に伝わったのが最大の良い結果である。実際の声としても、「今日の学びを自分の学校生活に活かしていきたい」や、「先輩たちのリアルな声から学ぶことができるのは、安心できる」などといったポジティブな反応が多く、模索しながらも良い環境を提供することができてよかったと感じている。そして、その環境づくりに励むことができたことこそが、私たちが高校生としてどのようにグローバル人材を育てる一歩を踏み出すことができるのか、という今回の私たちの探求を通しての問いの答えであると考えている。探求テーマを設定してから、初めはこのテーマを果たして私たち高校生が考え、解決していくことは可能なかと不安に思う一面もあったが、最終的に良い結果とともに、これからもこの学校に根付いていく形として残すことができたことは何よりの探究成果だ。

しかし、まだまだ私たちは課題を抱えている状況である。1番の問題は、つながる一むをこれから運営してくれる後輩たちを探し、育成していくことである。せっかく校長先生も交え、助成金をいただいたこのつながる一むという形だからこそ、これからも絶やさずにつなげていくことが何より重要であると考えている。今後卒業までの解決すべき点として後輩の中から私たちの活動に賛同してくれる生徒を見つけ、今までの活動や私たちの思いを伝えて、これからもつながる一むをつなげてもらえるように、まずは私たちからつながりを作ることを目標としてこれからも活動をしていこうと考えている。そして、日本の教育をどのように変えていくか、という問いに対するアプローチは大きくできなかったが、つながる一むのような環境が私たちの学校だけでなく、他の学校にも広まっていき「高校生からのグローバル人材育成」という目標を全国的に広めることが日本全体の教育を変えるという意識づくりの発端にはなれると考えている。そのためにも、つながる一むをこれからも続けていってもらい、国際高校から他の学校へ、そして日本へとつなげていくきっかけとなるようにまずは私たちから次世代へ、つながる一むを強化していきたい。

〈おわりに〉

この探究全体を通して、私はこれからどのような目標を持って成長していくべきなのかという指標を得ることができたと感じている。高校を卒業し、大学生になり社会に出ていく私たちだがその前に実際に世間がどのような人物を求めているのか、これからの未来をつくっていく私たちはどうあるべきなのか。これをこの高校生という将来を考える時期に探究し、気づくことができたことは人生の中で大きな学びであると思う。私たちの探究はつながる一むをつくる、という大きな目標を達成したがこれはまだスタートにすぎないと思う。今までの学びや想いを胸に、日々成長することを忘れず今後の未来につなげていきたい。

#### 参考資料

(資料1) 外務省 (2022). 「海外在留邦人数調査統計」.

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/index.html> (12/08/2022)

(資料2) インターブランドジャパン (2021). 「インターブランド『Best Global Brands 2021』レポート」. [https://www.interbrandjapan.com/ja/data/20211021\\_BGB2021\\_release.pdf](https://www.interbrandjapan.com/ja/data/20211021_BGB2021_release.pdf) (12/08/2022)

(資料3) TOYOTA (2022). 「採用メッセージ」.

<https://www.toyota-recruit.com/saiyo/about/message/> (12/08/2022)

(資料4) Apple (2022). 「Appleでの価値観」.

<https://www.apple.com/careers/jp/shared-values.html> (12/08/2022)

(資料5) TOEFL iBT (2021). 「Test and Score Data Summary 2021」

<https://www.ets.org/content/dam/ets-org/pdfs/toefl/toefl-ibt-test-score-data-summary-2021.pdf> (12/08/2022)

(資料6) Benesse (2019). 「高1英語学習に関する調査」

[https://berd.benesse.jp/up\\_images/research/all4.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/research/all4.pdf) (12/08/2022)